第二群　07

個々の口腔機能に合わせた食形態を探すお手伝い

―多職種連携チームでの試み―

宮城県拓桃医療療育センター医療療育局　リハビリテーション技術部　　畑崎　麻衣子
食事療養部　　佐々木　留美子

Key words：家族の思いによりそう　/　食の役割　/　地域での生活への支援

Ⅰ　はじめに

成長・発達期の子供にとり，食は栄養源であり，生活リズムの基本であり，そして何より日々の楽しみである。それは，何らかの疾患・障害により摂食機能に課題がある子供たちにとっても同様であるが，その調理や介助は多大な配慮や工夫，時間が必要であり家族の負担は大きい。そこで，摂食機能に課題があっても「大きくなってほしい」「作ったものを食べてほしい」「家族と同じものを食べさせたい」という親としての当たり前の願いを支え，食事が楽しい時間になる支援のあり方について，職種間で連携・試行しながら模索した経過について報告する。

Ⅱ　活動内容

１　個々の摂食機能に合わせた食形態を探すお手伝い～食形態基準の検討・試行～

障害児の咀嚼力，嚥下力は個別に微妙な違いがあり，画一的な形態では対応できない。そこで職種を超えて共有できる標準的な食形態の段階基準を設定し，新たな食種の追加や食形態の段階間を柔軟に移行できる食事提供方法を試行し，退院までに各自に合った形態が見つけられる支援方法にたどりついた。

２　おいしく楽しく安全な食事について伝える場の提供

～地域家族支援「お話シリーズ」においての各職種コラボの実現～

治療場面や看護，言語聴覚療法，栄養指導時に把握した課題を集約し，多職種で企画した食事介助体験や調理デモ等実際的な場面設定により，初めて本人・家族を集めた学習の機会が持てた。当院からの情報発信に留まらず，事前に日々奮闘している保護者自身の声や工夫ポイントを集約し，双方向の情報共有の機会となった。

３　食育を通じた食への関心の向上～「お楽しみ（味覚刺激）」としての食の役割～

食育の一環として「親子クッキング～おにぎりづくり～」を多職種連携で実施した。障害等により感情表現が難しい子供でも感触，香りなど食材や調理（つくること）を身近に感じることで，味覚刺激等の効果を期待し，また親子とのコミュニケーションの時間として「食べることは楽しい・嬉しい」という体験の機会を実施できた。

Ⅲ　考察

治療としての「食」や，発達段階である小児の摂食リハビリの特徴から，画一的な食形態では，対応しきれない面があったが，その目的を職種間で共有したことで，新たな食種の追加や食形態の段階間の柔軟な食事提供方法を試行でき，その結果，個々の摂食機能に合わせた食形態を探す支援のあり方が見えてきた。それを踏まえて，通常の食の支援の連携が強化されてきたことが土台なり，院内の多職種連携による，新たな活動の実現に結びついたと考える。さらに，本人・家族とのアプローチ場面の増加により，サポートする側だけではなく本来受ける側の当事者でも他の家族を応援したい思いがあることに気づき，医療療機関としての専門情報だけでなく生活支援等の身近な工夫点などを取り入れた，スタッフ，家族双方向の情報の発信方法を検討していく必要を感じている。併せて，今後の課題として退院後，地域戻った時に日々の食の困りごとを適時に解決していくため，各地域の身近な支援機関との必要と考える。

Ⅳ　結論

食は様々な役割を持ち，生活の基本であり，その支援の重要性は大きいが，個別差も大きい。また，成長・発達期の子どもは日々変化が著しく，食に関しても一時的な課題解決ではなく，発達状況に沿った生活全体への支援が重要である。そのためには，多面的なサポートが不可欠であり，支援に関わる各機関・多職種で目的を共有し，様々な場面で働きかけていくことが効果的である。摂食機能に課題があっても，その子に合わせて，家族がとともに楽しく食事の時間を持ち，その子なりの健やかな支援のあり方について本人・家族の思いに寄り添いながらさらに模索していきたい。